

「健やか親子 21」テーマグループ 1 関連
「日本母子看護学会」

日本母子看護学会の目的は「母子・家族・生殖看護学に関する研究及び実践能力の向上を図るためにお互いに研究研鑽し、母子保健の向上や、妊産婦や家族が満足できる出産育児、思春期の性教育に貢献すること」です。このことから本会は「健やか親子 21」に関連して、「妊産婦や家族が満足できる出産育児」「思春期の性教育」について啓発活動を行っていきます。

昨今の女性、特に出産を取り巻く環境は、女性の高学歴化と社会進出による少子・晩婚化、不妊治療など産婦人科医療の高度複雑化、さらには出産施設の減少、産婦人科医師の不足などたくさんの問題を抱えています。さらに社会の基本である家族、そこを基盤として行われる子育てについても、安心して実施できる環境とはいえないのが現状です。このような中、当学会は、臨床や教育の場に身を置く助産師や地域で活動している保健師が中心となり活動しています。そのため「自分の病気や障がいを持ちながら、サポートを受け、自分らしい妊娠・出産・育児を行っていくにはどうしていったらよいのだろう」「楽しく育児をしていくためにはどうしたらよいのだろう」など妊娠・出産・育児について、実践の場から獲得した具体的な方略を、医療・保健・地域に向かって啓発していくことができると考えています。

さらに健康に妊娠・出産を迎えるためには女性の身体が作られていく過程にも大きく影響されています。それに加え、子どもから大人へと変化を遂げる思春期に、女性も男性も自分の身体を大切にすることが、のちに命を大切にすることに繋がっています。思春期に誰もが持つ身体と心のアンバランスな状態を、周囲の大人たちも十分理解し、戸惑いや不安を抱きやすい若者をサポートしていくこと、そういったことが今、現代の思春期の教育に求められていることです。性教育とは「心が生きていく教育」、つまり一人一人が自分らしく、自分も周囲も大切に思う心をはぐくみながら、大人になっていくことをサポートする教育である、と考えています。

助産師・保健師が施設の中で、また地域で直接、あらゆる年代の女性とその家族をサポートしつつ、そこで分かったことを同じ医療従事者である仲間、対象者である妊産婦、思春期の若者たちに実践していくことこそ、健やか親子 21 が掲げている「切れ目のない妊産婦・乳幼児への保健対策」「学童期・思春期から成人期に向けた保健対策」であり、「すべての子どもが健やかに育つ社会」に繋がることと考えています。

文責：加藤千晶（日本母子看護学会常任理事・杏林大学保健学部）